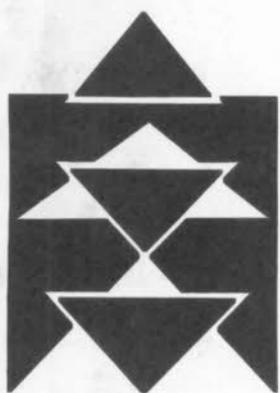


1987



高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074

第21号 昭和62年11月30日





百年に向かつて

同窓会会長 原 一雄

わが高崎高校の、開校九十周年を記念した式典は、六月六日厳肅清楚なうちに、見事に終了する事が出来ました。記念事業も、本命である翠榭会館の近代的な増改築が完成し、母校に学ぶ若い人達の為に、既に計り知れない寄与を始めております。九十周年小史も、多くの人に配布され、その読み易さと共に、次の百年史へ向かつての、力強い基礎づくりの出来ましたことは喜びにたえません。祝賀会も盛大に終りましたが、之らの主要行事が、この様に無事に全て予定通り完了出来ました事は、学校当局はもとより、実行委員会を形成する皆様の、長期に亘る、母校を愛する献身的な熱情、お力尽しのお蔭でありまして、ここに同窓会を代表して心から厚く御礼を申し上げます。

ここに至りますまでには、特に募金は、現下の円高不況のなか、一時は心配致した事もありますが、そういう心配を吹きとばして、別表に見られます通り、目標を見事に突破出来たのであります。流石は伝統ある高崎高校の歴史の重みと、母校愛に燃える諸兄の厚いお志に、改めて深い敬意を表した次第で御座います。御提出下さいました皆様に、茲に重ねてお礼申し上げます。

さていよいよ、次はわが母校の、最も大きな歴史の節目をなす、開校百年に向かつてであります。この記念すべき大きな事業は、当然積み重ねられた体験を礎として進められるべきことは勿論であります、之を

担うべき方々は、次代を担う新鋭の人達の力に依らねばなりません。是からの眼目は、その新しい準備へ向かつての出発であります。

わが高高同窓会は、会員の多くの方々の、献身的な母校愛に支えられて、財務内容に於ても、現在最も安定した堅実な状態にあります。年々の維持会費の払込みも、次第にその数を増して参りました。この事は、やはり毎年一万七千を超える同窓会報の、現存する全国同窓生への配布とつながっているものであります。年一回ながら同窓会報が、同窓生への、母校に対する関心の深さのつながりとなっている事を意義深く感ずるものであります。

また總會におきましても、その設営は、米正月は五十七期の方々の手によりますが、連年六百名を超える盛会であり、県下高校界の話題となっております。財団法人翠榭育英会も、わが高々精神の、理想とヒューマニテイの輝かしい現れでありまして、成績素行共に優秀であると認められた若い人々が、胸を張って授与式に臨む様には、胸熱いものを感じます。

三下精神にもとづく、文武両道を目ざして、名実共に県内は勿論、関東有数の名門校として、上級校への進学に於ても、またスポーツや各種のクラブ活動に於ても全国にその名をうたわれている事も、同慶の至りにたえません。この後共に、学校当局及び関係諸団体の限りない御協力をお願い申上げる次第であります。

高高同窓会報 No. 21 目次

百年に向かつて

同窓会会長 原 一雄 2

御挨拶 学校長 磯貝 福七 3

雑感 同窓会副会長 小山 裕一 3

ごあいさつ PTA会長 柴山雄二郎 4

ごあいさつ 通信制教頭 今井 保男 4

*特別寄稿

永遠のいのち 土岐 正 5

税金のゆくえを追う 中村 清 6

*ずいそう 息子の高校入学 岩崎 允彦 7

*私の回想記 二十七年生の回想 吉見東太郎 8

剣道と私 岡田 文平 9

ラグビーと山 志賀 勉 10

嗚呼、幻の革命の日々 熊倉 浩靖 11

灯は われらのもの 太田 芳雄 12

*卒業生の作品紹介① 予感と表現 島崎 庸夫 10

*ずいそう 夢の女 柳沢 和夫 13

*同窓会だより 記念誌「流翠」について

通信制同窓会 喜美候部圭吾 14

奨学生 延べ四十名になる 早乙女七五三男 14

田中 順 15



御挨拶

学校長 磯貝 福七

同窓会の皆様には、平素より格段の御尽力を賜り、誠にありがたく、衷心より感謝申し上げます。このたびは、九十周年記念事業として翠榭会館の増改築、九十周年小史の刊行などがなされましたのも、ひとえに皆様の絶大なる御助力の賜物と、深くお礼申し上げます。

さて、九十周年を機に、二十一世紀を展望しつつ、教職員と生徒とが一丸となって「信頼と礼儀のある教育」をモットーに努力しておりますが、進学の状況も上向いており、六つの部が関東大会に出場し、将棋部も全国大会に出場するなど、地道な活動を続けております。夏季休業中にも、猛暑の中、各部は合宿練習に余念がありませんでした。同時に数多くの補習が開講され、生徒と教師とが一体となって、汗を流しました。

本年八月には、臨時教育審議会の最終答申が出され、時代の波に即応した教育が叫ばれておりますが、「かわるもの」(当然かえるもの)と「かわらざるもの」(かえてはならぬもの)とをあらためてしっかりと見極める必要があると存じます。

幸い本校は恵まれた教育環境にありますが、それに甘んずることなく、衆知を集めつつ、よりすばらしい高々を目指して微力ながら全力を尽くす所存でございます。皆様のかわらぬ御援助をお願い申し上げます。



雑感

同窓会副会長 小山 禧一

暑い夏の一大イベントである高校野球大会がすみ、秋風の吹く頃となり、大会前は今年が高々がなんとか夏の甲子園に初出場出来、九十周年に花をそえることが出来るのではないかと、関係者の中でささやかれておりましたが、伏兵中央にしてやられ、夢と消え去ってしまいました。

それにしても「さわやか野球」を唱える甲子園のパーフェクト投手の松本監督に率いられた、中央の選手達の活躍は見事という外はありません。近頃は甲子園出場を目的とした或る意味では職業的な訓練をする高校がふえて来ている中で、普通高校の中央の活躍は正に清涼の衣服であったと思います。

「私の運は甲子園のパーフェクト試合で終わったと思っておりましたらまだ運が残ってしまいました」と話した松本監督のユニークさと謙虚さに感心しました。かつて私共の高々が春の甲子園に出場した時から、なんとなく「文武両道」という言葉がきかれるようになりましたが、第三者が「文武両道」とほめたたえて下さるのは大変嬉しいことですが、高々に関係ある私共が自ら「文武両道」という言葉をはくことは少し驕り高ぶった気持があるのではないのでしょうか。九十周年記念行事を無事に終えて次は百周年を迎えようとしております。百周年を高々に関係ない皆さんからも、さすがは高々だ、と祝福されるよう努力したいと思えます。



〈表紙〉岩山 猛 (49回)

*母校日より

運動部報告 岩井 寿史 16
学芸部報告 小笠原祐治 17

第41回高高・前高定期戦

進学状況について 上原 哲朗 17
創立九十周年記念事業報告 佐藤 忠弘 18

記事業実行委員会会長 原 一雄 19

翠榭文庫 吉永 哲郎 19

土屋文明氏が名誉県民に

草野心平氏に文化勲章

会計報告 20

第86回高高同窓会 20

新年総会へのお誘い 20

事務局日より 20



いあごんじ

PTA会長 柴山雄二郎

同窓会の皆様には、常日頃より高々発展の為に格段の御尽力を頂き誠にありがとうございます。とくに今年は、九十周年の記念事業として、翠櫛会館の増改築工事も完了し、おかげ様で今夏の各部の合宿では、今迄より遙かに快適な合宿生活を送ることができましたことを、紙上をかりまして御報告させて頂きます。誠にありがとうございます。

さて、今年度のPTA活動も順調に推移し、昨年度長野前会長のもと三事業委員会、即ち事業・セミナー・広報の各委員会が新設されましたが、今年も事業委員会では五地区の懇談会が九月で完了し、セミナー委員会も十月と十二月にそれぞれ開催の運びであります。広報委員会におきましては、すでに今年度第二十一号を発行、第二十二号を年内に発行の予定です。このようにPTA活動も職員学校長をはじめ学校関係者の皆様方の御指導を頂きながら、年々活発になりつつあることは御同慶に堪えません。PTA会報に高々生に望むこととして、「心の豊かな人」になるよう書きました。これは、職員学校長の教育方針の「信頼と礼儀のある教育」にも相通じることではないでしょうか。「学問の研鑽」に励むことはもちろん、「心の研鑽」に務めることもこれからの時代に必要ではないかと思えます。



いあごんじ

通信制教頭 今井 保男

本年四月一日から、通信制課程の勤務を命ぜられました。わたしは、本校の全日制課程に十年間お世話になりましたが、引続き、この伝統ある高々に奉職できますことを、大変有難く思っております。

本校通信制課程は、昭和三十四年に第一回の卒業生（二名）を送り出しましてから、二十八年間に、二四六名の同窓会員が果立っております。

本年度は、在籍生徒数六〇〇名（男三六〇名、女二四〇名）、平均年齢三〇・一歳、下は一五歳から上は六〇余歳までの幅広い年齢層の人たちが学んでおります。

忙しい職場、家庭の主婦などの生活の中で、レポート（報告課題）を作成し、月二回日曜日に実施するスクーリング（面接指導）に出席し、テスト（試験）を受けるという学習形態で勉強しております。

臨時教育審議会が、「生涯学習体系への移行」を提言いたしました。生徒の多様化と高齢化社会を迎えまして、通信制教育の担う役割と社会的責任がきわめて重大であることを認識し、職員一同、職務に精励していく所存でございます。

同窓生の皆様には、通信制教育に対し、一層の御理解と物心両面にわたる温かい御指導、御援助を賜りますようお願い申し上げます。

土屋文明氏が名誉県民に
草野心平氏に文化勲章

本校同窓の大先輩であり、昨年度文化勲章を受章した土屋文明氏に対して、群馬県は、このほど「名誉県民」の称号を贈りました。十月二十八日の県民の日に、清水一郎知事が上京し、土屋文明氏に直接、称号記と記念品が贈られ、これまでの功績がたたえられました。土屋文明氏は明治二十五年に群馬町に生まれ、高中、一高、東大を卒業、日本歌壇の最高峰に位置する歌人で、現在も万葉集の研究に情熱を傾けておられます。昨年の文化勲章の受章に引き続き、県民の誇りである名誉県民になられたことは、本校にとっても大きな誇りであります。

また、本校の校歌の作詞者である草野心平氏が今年度の文化勲章を受章されたことも、本校にとって、大きな喜びといえます。草野心平氏は日本芸術院会員で、中原中也らと詩誌「歷程」を創刊、以来日本詩壇の中枢で活躍、独自の生命と輝きをもった多くの作品を発表しておられます。本校の校歌が創立六十周年を記念して新しく制定されました折、作詞者として多くのご尽力をいただきました。

永遠のいのち



土岐 正

すが、アツという間に過ぎてしまった感じですが。

「まことに、あなた（天地の創造者―神）の目には千年もきのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようです。」此の言葉も詩篇九十篇の一節です。永遠に比べれば人生は一瞬の間のように短いものです。

私は医者として多くの人の死に接して来ましたが、昨日まで元気だった人が突然脳出血、クモ膜下出血、心筋梗塞等で死ぬことがあります。

先日私の知り合いの人が屋根を修理中「ウーン」と一声を出して倒れ約三分で此の世を去りました。

今年の六月には元氣だった私の姉が風呂に入っていた時、突然心筋梗塞で息を引き取りました。

このような突然の死に方は枚挙にいとまがない程です。

「あなたがたは、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。」（新約聖書、ヤコブ書 四章十四節）

二十一年前私は群馬郡医師会長をして東奔西走し、医師会活動に専念しておりましたが、反面人生のはかなさ、むなしさを痛切に感じておりました。

その当時高々の近くの消防小屋で聖書研究会が行われており、私の三人の息子達はそこへ出席するようにになりました。そして息子達が高々在学中予想もしなかったことですが、イエス・キリストを主と信じ救われました。その後私と家内は息子達から熱心にキリスト信仰を勧められましたが、先入観に囚われて頑強に拒否し続けて来ましたが、しかし信仰を持った息子達の態度が一変し兄弟仲よくなり、又素直になったのを知り、キリスト信仰の素晴らしさを次第に知るようになりました。息子達の熱望により、私の家で聖書の話聞く会が始まり、毎週火曜日夜、沼田からわざわざ成田敏夫さん（高々五十三回卒、伝導者）が来られて聖書から話をしてくださいました。

ここに聖書の伝える内容を紙面の都合で要点のみを列記しますと、

- 一、神は天地万物をお造りになり、万物を支配しておられます。
- 二、人間は神に造られたにもかかわらず、此の聖い、愛の神に背を向け、離れたため、すべての者が罪人となってしまいました。
- 三、人間は一度死ぬことと、死後さばきを受けることが定まっています。

四、罪の支払う報酬は死です。

五、聖い神と人間との間に立って、罪が赦されるために、神のひとり子であられるイエス・キリストが身代りになって私達人間のすべての罪を背負って十字架にかかって下さったのです。

六、キリストは聖書に書いてある通り、十字架の上で死に葬られましたが、三日目によみがえられました。

七、神の下さる賜物は、私達の主イエス・キリストにある永遠のいのちです。

八、永遠のいのちとは唯一まことの神と神から遣されたイエス・キリストを信じることであり、此の世を去っても神と共に正義と平和と聖い喜びのある素晴らしい天国で永遠に生きることなのです。

列記すれば簡単にみえますが数ヶ月をかけて説きあかして下さいました。その説きあかしを通し、又生ける神の力を見て、私も家内もイエス・キリストを主と信じ救われました。

永遠のいのちほど素晴らしいものはありません。私は今、人生のたそがれを迎えておりますが、永遠のいのちを賜物として戴き、希望を持って、日々神に感謝し、平安に過しております。

（土岐医院長 30回）

税金のゆくえを追う



中村 清

そのあらましを振りかえってみることにしたい。

まず、会計検査院とは何をする役所かをはっきりさせることから話を進めた。会計検査院は、一口にいえば、国民のために、国民に代わって税金のゆくえを検査する役所である。その役割を全うできるように、内閣から独立する唯一の行政機関となっている。検査対象としては、国はもとより、公団、公庫、事業団等百以上に及んでいるが、そのほか補助金等の関係で、都道府県、市町村、農協等も含んでいる。くまなく税金の使い途を明らかにしていくためといえよう。

しからば、実際にはどのような検査をしているか。これを三点に分けて理解を得ることにした。

第一は、財務及び合規性の検査を行っている。法令、予算等に従って適正に行われているかという検査である。例えば、一部の公立小中学校で生徒を増加して過大な報告をし、余分に国庫負担金を受けていた（三年間の検査で二〇億余円）、御殿のような豪邸に住みながら生活保護費を受けていたというような指摘がある。いずれも法令に違反するものといえよう。

第二は、経済性、効率性の検査を行っている。費用対効果という観点から、

同じ効果ならばより少ない費用で行うことはできなかつたか、同じ費用ならばより大きな効果を挙げることはできなかつたかという検査である。

例えば、国鉄が東北新幹線沿いに買収した都市施設用地が、地元との協議が整わなため荒れたままに放置されている（取得費用五五四億余円）というような指摘がある。

第三は、有効性の検査を行っている。事業が所期の目的を達成し、効果を挙げていくかという検査である。

例えば、水産庁関係の養殖場造成事業でせっかく造った消波堤が役に立っていない、あるいは増殖場造成事業で漁礁を造ったものの魚の生産が全く行われていないということと所期の効果が発現していない（国庫補助金一八億余円）とした指摘がある。

最後に、今後における検査の展望に触れた。会計検査院はどのような方向に進むべきかという問題である。

第一に、違法不当な事態の根絶をはかるという基本的使命をさらに徹底することにした。会計検査院が違法不当な事態を摘発する構えをとっていることは、その発生も予防することで、この抑止力は、今後とも弱めることがあってはならない。

第二に、経済性、効率性、有効性の

検査の充実に努めたい。そのためには、単年度にかかる検査ばかりでなく、長期的視点に立った検査、事業運営の改善に資する検査も重視していきたい。

第三に、検査を通じて行財政改革に寄与することを考慮したい。

この三点を強調したが、要は、時代の変化に即応しながら、いろいろな角度から今後の検査を進めていきたいと考えている。

私がこの講演を通して強調したかったのは、会計検査院としては、つねに国民の要望を吸い上げ、要望に沿うように努力していきたい、そのためには、会計検査院は国民に非常に近い存在であるということを確認していただきたい、その活動を見守っていただきたい——この点に尽きるといえよう。

今回の講演には、実にいろいろな立場の方が集まって下さったので、会計検査院が指摘した事例をできるだけ多く取り上げて、じかにその活動を知っていたように努めた。

聞き苦しい点多々あったとは思いますが、レジメや持参したノートにメモを取っている方もかなりいて、最後まで皆様が熱心に聞いて下さったことを、ここで改めて感謝したい。

（会計検査院検査官 46回）

去る六月十六日、高崎経済大学において「国の会計検査の現状と展望——税金のゆくえを追う——」と題する公開講演を行った。大学創立三十周年記念事業の一環として催されたものだが、固いテーマにもかかわらず、八百人収容の大講義室一杯に人が集まって下さった。山崎学長、松浦市長をはじめ、大学、県、市町村等の関係者のご努力によることはいうまでもない。

私としては、この講演で、会計検査院がどのようにして税金のムダ遣いを監視しているかを訴えたが、今ここで

●特別寄稿

わが家も長男が来春高校進学を迎えることとなり、私も自分の高校時代、すなわち高々の三年間（昭25—28年）のことを振り返ってみる機会がこのところ増えている。（因に、戦後、高中から高々に変わって、乗附での生活が今のよう

◇ずいそう◇

息子の
高校入学



岩崎 允彦

に三年になったのは、私たち52回生からである。）

当時はまだいろいろと不便な頃で、私の住んでいた草深い田舎（現群馬町）からの通学は時間もかかって大変だったが、それでも毎日ほるぼる学校に通うのが楽しくて仕方がなく、充実した青春時代を過ごしたのは幸せであった。大学入試の重圧も今ほどではなく、学校の勉強のほかに、歴史研究会やテニス、プラスチックといったクラブ活動にも精を出すことができた。

中曽根首相が当時まだ当選二、三回の青年代議士で、母校に講演にみえ、外遊の話を中心に、言葉が通じなくて床屋で失敗したくだりでは皆を大いに笑わせていたことなど、何故か鮮やかに記憶に残っているが、今思うとこれが私に外国というも

のを身近に感じさせた最初の出来事だったかも知れない。

さて、私は目下北欧のデンマークに在勤しており、息子も当地のアメリカン・スクール中学部に通学している。最初は英語で苦勞したようだが、三年経った今ではもうすっかり慣れ、外国人の友達とよく電話で三、四十分も楽しそうにおしゃべりをしてる。親の方は、一応職業柄、一見難しそうな用事の方は無事にこなせても、逆にこういうとりとめもない会話を長々とやるのはどうも苦手で、その点子供が自然に身につけた英語力、特にはつきりしない発音を聴き取るヒアリング力がうらやましい。一緒にテレビ映画を観ていても、「今、何といった？」と子供に教えてもらっている始末である。

その長男も近く母親同伴で日本に帰し、高校入試に臨ませることとなるが、何分、日頃は英語で日本の入試とは傾向の違う論文式の勉強に精を出しており、日本式の受験勉強に割く時間も、また、それを指導できる人も殆ど無い環境にいて、そこから急に帰る訳であるから、あまり高望みはできない。幸い帰国子女枠を設けて入学に便宜を図ってくれる学校が東京を中心に増えてきているので、息子もそういう学校のどれかを目指すことになる。

群馬の高崎の一角で、まだ見ぬ外国のことなどまるで夜空の星のように感じつつ、毎日何かを打込んで過ごしていた親の高校時代とは大部趣が違ひそうであるが、息子には折角身につけた国際

的な能力は今後も大いに伸ばして将来役立てるよう勉強して欲しいと願っている。

ところで、日本の教育については、臨教審答申を始め改革のための提案が多数出されているが、私はその中で、実施が比較的容易で、しかも教育の国際化という点では非常に効果があると思われる秋季入学制への切替えとすることをこの際大いに推奨したい。

秋季入学制の外国の学校から帰った中三や高三の生徒は、現在、すぐには日本での受験資格を認められないため、止むなく一旦公立中学校に編入のうえ受験せざるを得ないが、日本語では学力が劣るのも当然なこれら思春期の帰国子女にこのような余計な負担を課して摩擦を増やすことは、出来れば不要にしたいことであり、これは日本が国際的な秋季入学制に切替えさえすれば簡単に実現することである。

秋季入学制にはもともと根本的に、長い夏休みに中断されることなく一年間が有機的に使えりとか、より身近には、受験生の健康に悪い真冬の入試が無くなるか、現在の春季入学制にない利点が多数ある。切替えには金が掛かるといっても、経済大国日本が問題にするような額ではない。

桜の花の下の入学式に愛着を覚える向きもあるようだが、人間そういう変化にはすぐ慣れるものである。むしろこの切替えにより、「サクラチル」などという使われ方から解放されれば、桜も喜ぶのではなからうか。

（在デンマーク公使 52回）

7

私の回想記

●回想

二十七期生の回想

吉見東太郎

吾々二十七期は、ちょうど人生で言うなれば明六十三年が卒業以来還暦年になる。

当時母校は五年制で、学校所在地は現在の高崎市立一中で五年間の学生生活を過ごした。一年に入学した時に先ず感じた事は上級生、ことに五年生を見て兄貴と言うより叔父さんという印象を受けた。これは、この時代には学制が小学校から高等小学校であったから、一年生から五年生の年齢差が極端な例を挙げると七年はあるからで、この年齢差は吾々が四年生になった頃はなくなってきた。

入学年は思いもかけぬ事件と言うか災害が起り、子供心にも驚愕の極みだった。ちょうど暑中休暇が終り登校第一日正午所謂関東大震災が勃発した。高崎には中学、商業の二校が最高学府で、この様な場合には全校生徒で救護班を編成、高崎駅に出勤し、東京からの避難者の手助けをした。吾々は駅のホームで荷物などの受渡し程度、上級生は列車に乗り込んで遠くは長野方面ま

で出勤したと聞いた。この災害で学校は一週間位は休校同様だった。この天災は世の中の経済不況を惹起するに至り不景気と言う声を聞いた。吾々には直接的には感じなかったが保護者の親達は経済的に苦勞した様だった。その後一、二年間に同期生の何人かは止むなく中途退学を余儀なくされた友人もいた。

こんな暗い世とは異なり、学内での各運動部の活躍は旺盛で、武道では剣道の中島先生、柔道の田中先生は天覧試合に出場する程の名教師で、この両先生により毎日猛練習。ことに野球部においては、同期生今は亡き佐藤寿雄君の父上清先生（開業医）の熱心な御支援で後援会を作り、甲子園出場を目ざしての肝煎りだった。他県からの選手を連れてきたり、夏休みになると六大学の早大監督がコーチに来校、数名の現役有名選手（河合、氷室、竹内、長野）を伴って猛練習。どの様な関係で来られたのか私には未だに解らない。校庭は野球練習があると庭球部、陸上

部などは全く練習不可能、野球優先だ。厩屋同然の寄宿舎の残骸、相撲場、軍事教練の倉庫（銃器庫）等、庭は本当に狭かった。

その様な廃墟で、当時上級生によって「忠告」というのが行われた。登校下校時に上級生に挨拶しないと、不遜な態度、服装の乱れ等々、次第にはなんの理由か解らないで上級生の囲いに呼び出され、鉄拳の制裁を受ける。傷害の程でなくても、上級生に囲まれて威圧を受ける精神的衝撃は大きい。この様なケースがその後のストライキの一因ともなった。ちょうど四年生の秋、校内運動会で学年対抗リレーがあり、その判定が誤っていたので抗議を申込んだが学校当局は受けいれず、翌日に持ちこんだが当日になっても何等納得の出来る解決案を提示されず、学年主任教師が教室にて「授業を受けたくない者は教室を出ろ」と、威嚇する積りだったのがかえって逆効果。誰言うとなく「出よう」と皆出た。その状況を見た他教室の同期生は皆校門へ向かい、その行動に心を痛め諫言する教師もあればその反対の教師もいた。

この場面は六〇年経過した現在も克明に記憶している。これは、授業を放棄して校門を出ると言う事は重大な事柄ということを充分承知の上での行動だった。烏川の河原に集結し、学校当局の回答を要求、貫徹を期し明日この



増改築後の県庁会館

場に集合を約し、第一日は終わった。二日目は一名欠席で全員集合したが欠席者は校長の子弟なるため皆も諒とされていた様だった。三日目になって先輩が仲介の労をとり犠牲者を出さず円満解決した。

最高学年五年になった時、進学の問題が持ち挙って来た。四年修了時点で上級学校に受験可能であったが受験経験者によると前年同盟休校のために操行が皆一階級落ちたので多分これが進学に影響した。

いよいよ最終学年の夏、今でも同じ

剣道と私

私が剣道の道場に入門したのは小学校五年生の頃であった。この道場は、年中無休に近く、盆と正月以外は毎朝五時頃から稽古があった。毎朝起きるのが辛く、殊に、真冬の夜明け前の、冷えきった道場で、すっ裸になって稽古にきかえるときの寒さは忘れられない。稽古が終っても、太陽はまだ上ってこなかった。

高崎中学に入って、私は、武道として剣道を選び、剣道部にも入った。入

だがこの時も甲子園への野球熱が最高潮で、母校も今年こそ憧れの甲子園と全校あげて自他共に自信満々で果せるかな北関東予選では準決勝までコールドゲームで快勝し、決勝に桐中と対戦、これも楽勝かと思いきや阿部兄弟バッテリーに全く封ぜられ、甲子園行きの切符は遂に獲得出来なかった。桐中はこれが基礎となり毎年連勝となった。

五年間の純真な少年時代を経て今も尚社会人として二七期生六十余名の現存者によって回想録は綴られてゆく。

(歯科医 27回)

岡田 文平

門以来、この道場のしきたりで、竹刀だけの素振りばかりやらされてきた私は、中学で初めて防具をつけて稽古をした。それは、貧弱な竹の胴であった。初めは、中島秀次郎先生の教えを受け、先生が亡くなってからは、ご子息の義孝先生に指導して頂いた。先生は、国士館を卒業したばかりの猛者で、先生の突きは物凄く、その一撃で我々はすっ飛ばされ、倒れることもあった。

正月になると、全校の生徒は、一週

間、早朝から登校して寒稽古をした。この間は、通っていた道場の方は休めるから、私にとっては寒稽古の方が楽であった。寒稽古が終ると、校内で武道大会が開かれ、私は剣道に出場した。同じ学年同志の試合で、七人以上勝ち抜けは何かもらえるというので、七人目までできたとき、このことが頭をかすめた一瞬、面を打たれて敗けた。

その後、戦争が激しくなって、三年生の夏から工場に狩り出され、学校では稽古ができなくなった。道場も、若い人達が軍隊に召集されて人手不足となり、休業同然であった。私の経験した戦争中の剣道部は低学年のときだけであったから、昇段試験はなく、対外試合に出場したこともなかった。

四年生の八月、戦争が終って、我々はまた学校へ通うようになったが、米軍は物騒な武道を禁止してきた。クラブ活動ならよかろうと、剣道部を再建しようとしたがこれも駄目で、武道は学校から完全に消されてしまった。このとき、防具も全て焼却するよう指示されていたが、先生方は剣道の再開される日を期待して、生徒の家へ防具を避難させることにしたらしい。それとは知らず、立派な学校の黒胴の防具を、「頂いた」と早合点して、部員一同は大喜びでこれを家へ持ち帰った。それから、「頂いた」防具を担いで、私は高崎公園にあった武徳殿へ通って

稽古を続け、進学後は、桐生の道場まで出かけたこともある。

二十五、六年の頃であった。当時、東京に住んでいた私に、母から便りがあって、「高々から、以前預けておいた剣道の防具を返して欲しい、というので、お返しした」と書かれていた。幸い、母が大事に保管していたので、防具を無事に返すことができ、高々の剣道部再建に少しは役立ったと思う。それにしても、当時の先生方の読みの深さには、あらためて感服した。

二十六年には旧武道場を焼失し、その頃返した「預かっていた」防具もなくなつて、今、高々には当時を語る何物も残っていないと思う。しかし、少年の頃鍛えられた心と体は、今日までの私を支えてきてくれた。なお、二十歳の頃、健康診断の結果過激な運動を禁止されて、以後、竹刀を持ったことはない。したがって、私から技は消えてしまった。

(群馬高専教授 46回)



●回想

ラグビーと山

志賀 勉

普段、貧乏暇無しの類いの生活をしていると、高々時代のことについては、同級生との酒の肴にあの時はああだった、誰々は今何をしているというような話をする位なものだが、それも年に数回程度となっている。

そんな訳で、原稿を依頼されたのはよいが、何を書こうか迷っているところへ、たまたま、高々九十周年小史を拝見する機会があり、懐かしさとともに、原稿の種ができたと思んだ次第である。

小史によると、私達が卒業した昭和三十三年度の校内のトップニュースに前高定期戦が挙げられている。

その定期戦のラグビーに出場したのは、今も良い酒の肴である。

当時、我校のラグビー部は県内では無敵だったこともあり、定期戦は、部員以外の寄せ集めの選手で戦った。

当時の写真を見ると、野球部、柔道部、サッカー部、剣道部、新聞部、私の所属していた山岳部等から自薦、他薦（ほとんどは自薦だった）が集り、

前高の正規のクラブと対戦し、得点は記憶にないが、堂々の勝点をあげた。

同級生にはどういいうわけか、ラグビー好きが多く、卒業の翌々年の昭和三十六年六月には定期戦出場者とラグビー部員だった同級生で現役部員との試合を行っている。

六月は、夏合宿前であり、未だ鍛えられていない時をねらったの深謀遠慮であったが、結果は、二十一対三で惨敗であった。とはいえ、天候も悪く泥んこになった試合後の写真は、皆嬉しそうに、満ち足りた顔をしており、何バカ気味ではないかと思われるものである。

私は山岳部に所属していたものであるが、実は、山岳部への入部は、スキームも出来て面白そうだということでも人かと結託しての不純なものであったが、入部した年の夏合宿で絞られたのが、かえって幸？ したのかそれ以来山にはラグビーとはまた別な魅力を感じている。

当時、皆貧乏部員であり、谷川連峰

の縦走合宿であったが、法師に一泊、平標に一泊と、ここまででは良かったが、次いで肩の小屋付近での泊の予定を急遽変更、マチガ沢合宿まで下るといって強行軍で、出合に着いたのが夜の十二時、晩飯にありついたので午前二時過ぎというように乱暴なものであった。

高女の山岳部が気の毒がって、おにぎりの差入れをしてくれ、海苔の入ったおじやのような晩飯であった。

こんな事があって、山行きが好きになったのだから、結託して入部した輩も含めて、少々変な感覚を持っていたのかもしれないと思っている。

当時一つの運動部にしか所属してはいけないという決りがあり、ラグビー部には入れなかったが、対外試合に部

員として出場させてもらっていた関係もあり、卒業の時にOBに加えてもらっている。

こんな事をやってばかりの高々時代であったが、こうした中から高々の気風、あるいは精神といったものが身に付いたのかと考えさせられているし、又一緒にこんな事をやって来た者とは切っても切れない何かがあるのか、今も交際が続いており、高々時代に得た大きな財産と感じている。

とめどもない話になったが、最後に、山岳部の仲間で、高々入学後間もなく山で逝った吉原重夫君の冥福を祈って筆を擱かせていただく。

(58回)

卒業生の作品紹介③

予感と表現

私は生まれて四十年近く公園の中に住み、そこを舞台にあやなす人間模様を肌にしてきた。そのせいか私の手は独りごとを言っている時の思いを人間をかりて呟くので

島崎 庸夫

ある。どうにもならない人間のくだわりが二十数年も記憶のひだを溶かして白い小さな広場に人間の虚構を焼きつけてきた。

この写真の母と子も小さな白い

嗚呼、幻の革命の日々

熊倉 浩靖

わが翠巒の千余日を、回想する齡となりしを認めるのは、何とも気が重い。されど、母校の門を出でて早や十六年。日々は、手繰り出される世界と化した。想えば、わが翠巒の日々は、70年安保・沖繩・大学闘争の嵐の中にあつた。母校の門を叩くことを志した年の秋、一九六七年一〇月八日、ひとりの京大生の命と引きかえに開かれた「革命」の季節は、一九六九年一月一八、一九の両日、東大時計台の闘いにおいて、ひとつの頂点をきわめていた。時に我らは高々一年生。「革命」の主役達のすぐ後を襲う世代として、その衝撃は大きかった。時が変わるかもしれないという意識がじわりと我らを包んだ。ブラウン管を通して流される「兄貴」達の闘い、発せられる言葉に酔つた。「叛乱する知性」「わが解体」「自己切開」。何と快い言葉だつたことか。それは暴力ではなかつた。圧制と暴力に対する捨身の異議申し立てだつた。志において、「兄貴」達の世界を共有しようとしていた。街頭にこそ出なかつ

たものの、我らも闘いの中にいた。学習の原点に帰れ、学びし者の原点に帰れ、批判的知性になれ。それが我らの旗印だつた。そこで勝ち得たものはあまりに貧弱だつたかもしれない。革命とは縁遠いものだつたかもしれない。しかし、我らは本当にそう思つていた。そんな季節の中に翠巒の日々を過ごしたことを、私は幸せに思つている。だが、そうした日々さえもが、すでに年表の中の出来事に風化しつつある。紅顔のかんばせは不惑に向かつて釣瓶落としに傾き、時代もまた移ろつた。早春の萌え出でし感性、時の転形を鋭敏に嗅ぎとつたと自負し、進んで火中の栗を拾わんとした、あの熱情は、何処に凍りついたのか。いま、凍りついた熱情を融かさんとした時、熱情自体が氷解することを怖れるばかりである。やはり我らも、年老いたのである。回想に直面できる齡になれたのである。回想は、安住の場としてのみあるのではない。むしろそれは、今の怠惰を叱責する存在として、その真価を発揮



空間での試練に耐えて産み落とされた一作、告発の絵でもある。この絵に試みられた(ひっかき)は、瞬時のアクションによつて生まれる人間感情の刹那の表現である。切り裂かれた傷口から億万年の眠りから覚めて、マグマが噴きあがる予感に震えるのだ。世の中への憤りがこんな表現をかりて当分は続きそうである。

高崎市立長野郷中学校勤務
51回



第46回創元展 (1987)

母と子 島崎庸夫

● 回想

灯は われらのもの

太田 芳雄

する。だからと言って、それを怖れてはなるまい。いかに若き日の情熱が純粹で気高こうとも、齡の重みは、それを越えて、今の我らに批判を与える。あの「革命」の日々の熱情を、今の世にいかにか軟着陸させるべきか。「革命」の日々を高々生として、この町、高崎に生きた我らには、その責任がある。ひとつの時代を生き続ける責任がある。

あの「革命」の日々を憶い起す度に、私は、それを思わずにはいられない。ではどうしたらよいのかとなると、私は、未だ口を開くことができない。漸く回想を始められる齡になれたばかりにすぎないからである。社会人として、母校を育んだ町、高崎に生き続けるようにする人間として、我らが翠巒の

日々の回想が、私に責任を感じさせたにすぎないからである。そのことが、私をして、翠巒の日々を回想することに、何とも気を重くさせている。だがしかし、ひとつの予感がたしかにしている。あの時の我らの旗印、「学びし者の原点に帰れ、批判的知性になれ」という志は、時代を超え、目標を変えて、なお正しいのではないか。少なくともそれだけは、わが翠巒の日に学びきったわが原点である。母校が我らに与えた永遠の命題である。これを大切に、なお我らが回想をじわりじわりと温め続けていきたいものである。

(70期・備CAD計画研究所)

三十数年ぶりの同窓の集まりで、「高陽会」と称することを決めたのは、高崎市立高陽中学校第二回卒業生五十数名でした。この中には一年余分通って学制切り替えの新制高校卒業の免状をもらった者も入っています。

高陽中学というのは、夜間中学で、卒業生は一、二回だけで、あとは高高の定時制となりました。

一回生は、努力家が多く、皆立派な人生を送られておるようですが、私たち二回は、かっこうをつけての蜜カラなどではなく、根っからそのままの蜜カラが多かったと思います。

私がこの学校に入らざるをえなかったのは、その前、何回かの入試を人に言えないような恥かしいことでしくじったの果てで、ほかに行くところもなく、やけっぱちに支配されていきました。が、仲間のみんなは、何とも深々として人間的で、ごついのに優しく、あれは、小さい時から自分のことはあまり考えないし、考えてもらえなかった人種かもしれません。

だから、卒業などはどうでもよくって、みんなと別れるのが嫌で、落第しようと思ったほどでした。

あの護国神社の森に夕闇が迫る頃、高中の借り物の校舎に灯がともると、校舎は借り物でも、灯だけは自分たちのものという気がして、暗く切ない思いの中に、その灯だけをよりどころとして集まっていきました。

その明りの中の二階の真ん中辺に、小さな職員室があつて、大月先生とか佐藤弥之助先生、岩淵先生、大谷先生、柏原先生、三俣先生、瀬戸先生などがストロップのまわりなどで、たばこをふかしておられました。

瀬戸先生は、武道場の中にお住みになつておられ、私はよく授業をぬけ出していつて、奥さんにかき餅を焼いてもらったりしました。先生は詩人で、息子さんに啄郎という名をつけ、郷里北海道へ帰られてから、詩集「雲虫」を出されました。

私は、その頃、さばりにさばって、点もとれなくなっていたので、「人間

をつくるために試験制度を廃止するよるに」と、竹下校長に訴えましたが、相手にしてもらえませんでした。物理の柳沼先生は、「お前が一番で、二番三番四番、あとはみんな昼間のやつらだ」というようなことを言つて、何のことかと思つてみると、目の覚めるようなげんこつが飛んできたりしました。

今思つてもそうなのですが、定時制といふのはどうもおかしい。授業はどこでも定時に行われるのですから、むしろ夜学のほうが私たちの想いの中でもふさわしいと思います。

夜学生から、どえらい人が出ないのは、能力や何かよりも、もともと、世の中を目にみえないところで支えるという人柄のせいかもしれません。

(高陽中 2回)



国体で優勝した体操部諸君と

◇ずいそう◇

夢の女

柳沢 和夫

私は時々故郷の夢を見るようになった。

三十年もへだたった懐かしい場所がふと夢の中によみがえってくるのだ。

右手に海を見ながら車を走らせている。その海は湘南あたりの海だろうか、鎌倉から逗子の方へ走行中と言ったところだ。

夢の中ではいつの間にか、海が川になって川瀬が陽光を映して流れている。

急に懐かしい思いがこみあげてくる。此の道は完成したばかりの国道十七号で、右手に鳥川を眺め山口君ちの高松荘あたりからこんどは高崎公園下へ向かっている。

国道は現在は車がのべつ行き交い、狭く感じるが、当時は自家用車は殆んど無く、テレビも無かった頃だ。道は広く閑散としていた。夏の夕方など自転車走らせると爽快だった。

やがて夢の中で私は公園の坂道を上るのだが公園の風景は消え、寺院ばかり立ち並ぶ寺町の中を歩く。どこかの寺に案内を乞うと庫裡の奥から女性が現れる。

白地に秋草をあしらった単衣に夏帯の着物姿だ。手にした花束を私に渡す。娘はなぜだか果立女子高の生徒であると思う。私も高校生になつていて胸がどきどきしてくる。

娘はこのお寺は道成寺ですと言う。おかしいぞ高崎に道成寺があつたかなと夢の中で考えるが、ある筈は

ないと思えばここで夢から醒めるか、醒めないまでも自分がいま夢を見ている状態であるといくらか自覚して睡眠を続けるのだが、私は娘に花束の代金を払う。どう言う訳か百五十円払っている。

昭和二十七、八年頃の百五十円はいまの貨幣価値になおすと二、三千円ぐらいに相当するだろうか。しかし夢の中でそんな計算があつた訳でなく、花束の値段をみたつもりもない。

花の外には松ばかり暮れそめて鐘や響くらんと、「道成寺」の一節を思い浮べながら参観しようとする

と、娘の父親と覚しき僧形の男が現れ代金はいらないと言う。現実の私は男と同じくらしいの中年だが、夢の中では素直な少年になつていて。

そこで私は眠りから覚め、夢の中の道成寺で少し遊びたかつたのにと残念に思う。これはカネに怨みのある夢なのかな？ 道成寺だから。

「つねによく見る夢ながら、あやしなつかし身にぞ染む。曾ては知らぬ女なれど想われ想うかの女よ……」とフランス象徴派の詩人ヴェルレーヌは夢の女を詩う。ヴェルレーヌにしてはさほどの詩ではないだろうが、上田敏の「海潮音」の名訳は忘れ難い。

—汝がことも夢に見るまで距たりてあるいは楽し夢の中の遊び

土屋文明先生九十歳の折、夢に現れる亡き妻を偲び歌つたものという。夢の中の遊びとは愛妻との楽しい語らいであろうか。九十翁にして純情な歌のしらべである。

夢には未来を予見するものもあるという。どこか見知らぬ土地へ旅行して、それが初めての土地ではなく、以前一度訪れたことがあるような妙な気がしてくる。それはかつて夢で訪れた場所のように思えるのだ。

歌舞伎芝居では白井権八が吉原で馴染みの遊女小紫と同衾しながら自分が処刑される夢を見て、間近に迫

る身のさだめを知る場面があり、清元では語り処となつている。平安時代の史書「大鏡」に藤原道長の祖父師輔の若い頃の夢の話がある。

朱雀門の前に左右の足を踏んばって北向きに皇居である内裏を抱いて立つ姿で、天皇の居所をわが胸に抱くとは吉相この上ない雄大な夢だ。師輔は人々に得意の表情で話して聞かせた。

ところがそこにこざかしい女房がいて、「いかに御股痛くおはしましつらむ」と、半畳を入れてしまった。

気のきいた冗談のつもりこのまぜかえしにあつて、せつかくの吉兆の夢が狂ってしまった。夢違いと言つて夢の暗示が実現しないことになる。

そのため一族の榮華はきわまつたが師輔自身は摂政、関白になれずじまいに終わった。これは夢違いのせいだなどと作者は乱暴なことを言っている。

師輔は深夜、内裏の会議から退出した道すがら百鬼夜行に出遇つて冷静に切り抜けたと「大鏡」は伝える。百鬼夜行とは深夜に妖怪どもがうち連れて街を行くもので、これに遭遇すると命が危ないとされた。怨霊や物の怪が歴史のなかをまかり通るのである。

源氏物語「夕顔」や「葵」の巻に現われる物の怪や生霊など、単なるフィクションではなく、実際それ等のなかで日常生活が営まれたと知るべきだろう。

近頃、私もでっかい夢を見た。女性のモードが故郷の山河に交響した夢だ。利根川べりのホテルからの眺めのように、榛名、赤城が双の乳房、その北の方に白く輝く峰々が首に、果片あたりがへソになるのか、一筋の川は群馬の森に向かって流れて行く。早春の上州のやや荒涼とした景色と言えようか。

これなどフロイド流に解釈すれば、近未来の我が不能を暗示しているかのようで、いささか心細くなってきた。これはどうか夢違いであつて欲しい。

(京浜高々会幹事 53回)

同窓会だより

記念誌「流翠」 について

喜美候部主吾

昭和十七年三月第四十一期生として卒業したわれわれは、会名も直截簡明に、「高中四一会」と称し、毎年一月十四日を定例新年總會開催日と決め、会員相互の親睦と交流をはかり、併せて母校の発展に協力して今日に至っている。会員の大多数は大正十三年生れ、高中入学の年に支那事変、卒業前年の暮には太平洋戦争勃発、そして敗戦、日本の歴史が書きかえられる時期に青春時代を送った。学校教育も日増しに軍事色を

強め、向学の念に燃えられわれも好むと好まざるとにかかわらず戦争に駆りたてられた時だった。爾米星霜を重ねること四十五年、入学時より数えるときは正に半世紀、遙けくきつるものかなの感がある。この「高中四一会」がいつ、どのような経緯をたどって成立したかは定かではないが、恐らく卒業時の或るクラスがそのクラス単独で催していたものが戦後発展し、至極当然のこととして四十一期卒業生（四年修了者も含む）全員を網羅するものとなったものであろう。幸に当時校内幹事として田島秀雄君がおり、世話役としての松本富平、須賀好真両君の尽力も、この会の基盤確立に与って力があつた。前記の如くここ二十数年間、毎年一月十四日夕を新年總會開催日として、高崎市内、時には近隣温泉地を会場として会合を開いている。また東京

には「京浜高中四一会」なる京浜地区在住会員による組織もあり、毎年幹事をきめての会合も催され、地元高崎よりも出来る限り出席して情報交換を行っている。

去る昭和四十七年には卒業三十周年記念事業として、当時の校長であり、われわれの恩師でもある安居次夫先生揮毫の「流水有思」の三波石を玄関前植込の中に据えた。

早乙女七五三男

通信制同窓会

龍広寺住職 精薄施
設清涼園長 41回

き日を迎え得るや、神仏のみ知るところであろう。

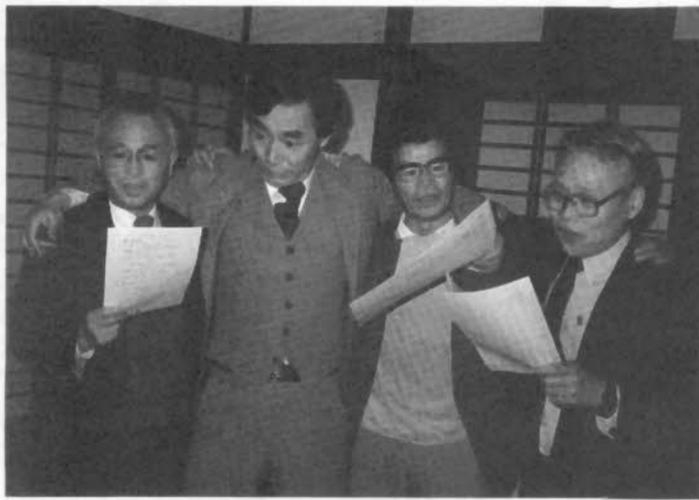
本年一月十四日、高崎ターミナルホテルに於て、新年總會と会員金井三行君の高崎市助就任祝賀会を催した。その折、会員中より卒業四十五年の節目を迎えたこの時、静かに往時を追想し、激動の中を歩み来つたわれわれ自身の昭和史を綴り、記念誌として残すことは意義あることではないかとの発言あり、直ちにこれを承認し、編集委員会を組織し、具体的作業を開始、現在進行中である。そしてその誌名を「流翠」とした。その所以は「流水長き思ひ」「翠巒」にも通じ、その意味は「木々のみどりか、したたり落ちるかのようみどりか、したたり落ちるかのよう鮮やかに見える」とあり、まさににわれわれの些細なる願望を託した格好の誌名と考えた結果である。

母校も十年後には創立百周年の栄光の年を迎える。生死無常の人生、果して何ん人が残り、この記念すべき日を迎えるや、神仏のみ知るところであろう。

「オーツ、ヤッタア！」
「ヨシ、上等、上等！」
「一字、一句、見落とさないように読もうヨ、せつかくの手作りだからナ。」
「A4サイズ一枚だけど、両面編集となると大変な時間を費やすネ」
「貴重な日曜日を何回つぶしたかな」
「だから中味は断然濃いヨ」
「手伝ってみてはじめて大変なことがよくわかった」
「いやあ、担当の先生には大分助けてもらったよ」
「サーテ、発送の準備をしよう」
「もう昼だよ」

* * *

恒例の卒業祝賀会が三月、終わると間もなく新年度です。
ことしは役員の改選があり、事務



田中 順

翠櫛育英会は、昭和五十九年度より事業を実施してまいりました。三年目に入った奨学金給付事業は

引継ぎなど忙しく、然しまごまごしているうちに、もう五月、会報の発行時期が近づき編集会議も回を重ねてようやく出来上がった会報を手に、これから発送する場面でした。
さて発送を終えてホッとすると次は納涼懇親会の往復はがきを準備しなければなりません。印刷依頼を済ませると宛名書きが待っています。これも発送が済むと返信の整理があります。出欠の返事に一喜一憂しながら出席者名簿を作成、さていよいよ当日です。本部、原同窓会長より「なごやかに気持ちを一つにもつていくように手取るように伝わってくるよう、いつもこの会へ出席す

るのを楽しみにしています。」
新年同窓会、当番期代表山口保男氏「来年一月二十三日、ビューホテルでの新年総会をよろしく……」
なごやかに宴会も進み、例によって翠櫛を歌い、校歌、生徒会の歌といよいよお開きで、名残り惜しみつつ時は過ぎぬ。
本年最後の幹事会が十一月に開催されます。そこでは夏の懇親会の会計決算、移転者の名簿整理等の雑務そして来年の行事予定などの策定を予定しております。十二月、忘年会。一月、新年同窓会。二月、臨時幹事会、数回。三月は総会並びに卒業祝賀会。また仲間が増えて楽しみです。一年は慌しく過ぎて行きます。
(通信制同窓会会長 通8回)

奨学生

延べ四十名になる

今年度の奨学生採用者十四名を加えて、標記の通り延べ四十名に達しました。男子三十五名、女子五名。
生徒の居住地は西毛地区のほぼ全域に及んでおります(高崎、安中、藤岡、富岡、榛名、箕郷、吉井の四市三町)。この間、卒業生は男子七名、女子二名になり、手厚い感謝の手紙が寄せられたり、経済事情が好転し給付継続を辞退して他の生徒に機会を与えてくれた母子家庭もありました。六十一年度高合格者の一人が家庭の事情で入学を辞退したという、群馬県母親大会での男女雇用機会均等法についての記事に接し、甚だしく反省させられたものでした。どんな事情があつたにしろ手を差し延べられなかった非力さを痛感し、眠れぬ日々を悔恨の情をもって過しました。本育英会の存在とその活用のPRが必要です。
発足時の貸付信託金利七・二%から現在の四・七六%になったため、基本財産運用果実が減少し、財団運営も厳しい環境下におかれております。この間、叙勲、褒章、顕彰を受けられた先輩から郷党の子弟育成の為の御寄付が続々と寄せられております。今年に入って、豊田一男(26回)、亀田東伍(27回)、故小川健二(30回)、松沢睦(48回)の各先輩より寄

付金をいただきました。特記すべきは、原稿依頼の求めに応じて会報に特別寄稿「ふるさとの誇り」の玉稿を寄せられた元日共中執の亀田先輩からは、病床にあつたにも拘らず同窓会が母体となっている本育英会の趣旨にいたく感動されて寄付金を送りいただきました。親書にて法人の理念の高さと私達役員の無私の協力に敬意を表していただき、これが新しい「ふるさとの誇り」の一つとして成長される様にとの激励の言葉を頂きました。同窓会の仕事をさせていただいておりますと、同窓の皆様からヒューマニティーに満ちた高精神の発露に感銘を覚えることしきりです。尚、特定公益法人に対する財産寄付は相続税の非課税措置、公益法人に対するの贈与も、一定の要件を満たすものとの承認を受けたものは非課税になります。
地域社会に開かれた同窓会としての一つの姿が翠櫛育英会であるとの御認識をいただき、今後益々の御理解と御支援を御願ひ申し上げます。終りに、事業のもう一つの柱として学校教育補助事業の子算実行が果たせない恨みがあります。今のところ将棋部の全国大会出場のみです。後輩各位の奮闘を期待いたします。
(51回)

母校だより

◇運動部報告◇

ラグビー部関東大会出場30回表彰

田端選手空手道個人関東ベスト8進出

関東大会出場を決めたのは、バスケット部、ラグビー部、空手道部、陸上部、弓道部、冬季種目のスキー部、以上であり、中でもラグビー部は、関東大会30回出場という輝かしい榮譽ある表彰を受けたのが目立ちました。

全国大会出場の声がなかなか聞けず、大変残念ではありますが、文武両道を目標に努力を続けておりますので、御支援の程よろしくお願い致します。各部の主な成績は次のとおりです。

○野球部

秋季大会ベスト4、春季大会ベスト4、夏季大会ベスト4、秋季大会3回戦敗退

○ラグビー部

新人大会ベスト4、県総体ベスト4、関東大会出場(群馬) 30回表彰

○サッカー部

新人大会3回戦敗退、県総体3回戦

敗退、全国総体予選3回戦敗退、高校選手権大会県予選西毛地区代表決定戦敗退

○バスケット部

新人大会準優勝、県総体準優勝、関東大会出場(山梨)、全国県予選準優勝、県強化大会準優勝

○バレー部

新人大会ベスト16、県総体ベスト8、全国大会県予選ベスト8、国体予選ベスト16

○軟式庭球部

県総体ベスト16、インターハイ県予選ベスト16、新人大会個人ベスト16 (織茂・宮田組)(新井・綿貫組)、団体3位

○陸上競技部

県総体三段跳5位岸 裕司(3年)、110MH6位因 直輝(2年)、以上関東大会出場、新人大会110

以上関東大会出場、新人大会110

MH3位因 直輝(2年)、3000M障害4位茂原賢三(1年)、棒高跳6位鈴木史郎(1年)、400MR5位(相原・松本・佐伯・佐藤)

○水泳部

県総体出場、新人大会1000M平泳3位・200M平泳3位加藤智之(1年)、学校対抗100M平泳3位・200M平泳4位加藤智之

○柔道部

新人大会ベスト8、関東新人県予選ベスト8、県総体ベスト16、国体予選60kg以下級2位長谷川亮(1年)

○剣道部

新人戦出場、1年生大会ベスト16、県総体ベスト16、全国県予選ベスト16

○硬式庭球部

新人大会ダブルスベスト16(友田・関組)、県総体団体3位

○卓球部

新人大会ベスト8、県総体ベスト16、全国県予選ベスト16

○弓道部

新人大会出場、春季大会出場、インターハイ県予選出場、県総体個人3位木暮友伸(2年) 関東大会出場

○空手道部

県総体団体ベスト8・個人田端広英

2位、関東大会出場(水戸) ベスト8、インターハイ予選団体ベスト8、個人島方・竹内・田端ベスト16

○登山部

県総体11位

○応援部

各種応援他

○スキー部

関東大会県予選スラローム19位村田和亮(2年)、22位金子哲也(2年)、25位村上 正(3年)、ジャイアントスラローム25位村田和亮(2年) 以上関東大会出場

(運動部長 岩井寿史)



進学状況について

過去三年間の進路状況は下表の通りです。進路希望の実態を過去三年間の平均で見ると、入学時は全員が大学(四年制)進学希望でして、三年次の受験直前時では大学進学希望者は九十八%以上、短期大学・専修各種学校・就職希望者の合計が二%以下という状況になっており、ほとんど全員が大学進学希望であることは現在も変わっておりません。

昭和六十二年度国立大入試(六十二年三月卒業生)は、共通一次試験が開始されてから初めてのA・Bグループ分けによる複数受験が行われた入試でしたが、高高としては国公立・私立大ともに例年に比べてよい結果だったといえます。浪人生もがんばりましたが、特に現役生の健闘が目立ちました。複数受験の影響はあったとはいえ、東大現役合格者八名をはじめとして、下表からもわかるように現役進学者数も伸びました。

文武両道を目標に、三F精神のもとに在校生達がんばっているわけですが、部活生徒も多く現役合格を果しました。それらの中で、年間を通して放

課後遅くまで活動している部活生徒達の合格状況を若干あげてみますと、次の通りです。北海道大で三名中一名、東北大で七名中四名、筑波大で六名中三名、東京大で八名中三名、東京工業大で一名中一名、京都大で四名中二名、慶応大で十一名中三名、早稲田大で十五名中五名が合格しております。

以上が、六十二年入試結果の概略で、それなりの成果を得た入試でしたが、全体的内容を分析してみますと、旧一期校などを中心としていくつか課題点もありました。今後、より向上させていきたいと考えております。

さて、現三年生が受験する六十三年入試ですが、共通一次試験後の自己採点が復活するなど、またまた多少の変更が行われる入試になります。早稲田・慶応大をはじめとして私立大学も影響を受け、難化傾向にあります。結局は、実力のある者から合格していくという国公立大・私立大入試となることが予想されます。

このような全国的情勢の中で、高高ではあくまでも授業を中心にすえて、課外・校内外模試等も行いながら学力をより向上させ、生徒のもつ志望を達成させるべく全職員が一丸となって努力しております。

今後の各位の一層の御鞭撻をお願いいたします。

(進路指導部長 佐藤忠弘)

進学状況(全日制)

()は現役

大学	年次			大学	年次		
	60年	61年	62年		60年	61年	62年
北大	6(2)	15(6)	5(3)	早大	59(13)	56(5)	59(5)
東北大	18(5)	20(10)	13(7)	慶応大	35(12)	24(0)	34(11)
東京大	7(4)	6(4)	12(8)	中央大	35(8)	51(5)	46(16)
一橋大	3(2)	6(3)	3(1)	明治大	63(9)	48(1)	66(19)
東工大	2(0)	0(0)	4(1)	日本大	38(10)	54(5)	43(12)
千葉大	6(2)	10(4)	12(7)	上智大	17(4)	19(7)	11(5)
京都大	2(1)	5(2)	6(4)	法政大	27(6)	33(8)	27(4)
新潟大	14(9)	16(11)	15(5)	立教大	15(3)	9(4)	12(4)
筑波大	8(2)	8(3)	9(6)	東京電機大	6(0)	6(2)	8(1)
金沢大	1(0)	5(3)	15(7)	東京理大	32(6)	36(10)	43(10)
東外大	3(2)	1(0)	3(3)	芝浦工大	4(2)	10(5)	8(2)
群馬大	60(29)	46(25)	45(26)	成蹊大	6(4)	5(2)	4(1)
横国大	5(2)	5(1)	16(4)	学習院大	10(1)	5(2)	9(5)
静岡大	1(1)	3(1)	2(0)	青山学院大	16(5)	22(2)	10(4)
山梨大	2(2)	0(0)	1(0)	武蔵大	1(0)	4(1)	6(2)
埼玉大	6(4)	4(3)	8(5)	同志社大	4(2)	4(4)	5(1)
信州大	6(2)	3(1)	7(4)	立命館大	10(3)	4(1)	12(4)
横浜市大	3(2)	0(0)	3(1)	その他	174(39)	194(36)	220(64)
高経大	31(9)	22(6)	25(14)				

種別合計(全日制)

現役進学者数 (合格者数)	卒業生数	総計(延数)	種別			大学名			
			D 短大・各種他	A+B+C	A 国立		B 公立	C 私立	
40.6%	152	405	743	7	736	512	47	177	60年
43.7%	164	403	766	7	759	542	36	181	61年
47.6%	192	402	835	8	827	563	40	224	62年

創立九十周年記念事業報告

記念事業実行委員会会長 原 一雄

母校創立九十周年を迎えるにあたり、同窓会では記念事業をおこすことに決し、PTA・教育後援会に協力をお願いして、昭和六十年十月「群馬県立高崎高等学校創立九十周年記念事業実行委員会」を組織しました。

実行委員会では、記念事業として老朽化が目立つ翠櫛会館の増改築を主とし、「九十周年小史」の刊行と記念式

典の挙行を併せて行うことを決定いたしました。

ただちに、この事業の予算を計上して、募金活動に入りましたが、折しも円高不況の厳しい経済情勢下において、会員各位にはご無理をお願いすることになってしまいました。しかし、会員各位の暖いご協力と募金委員各位の献身的なご尽力により、千三百六十一件、四千二百六十二万一千円のご厚志をいただきました。ご協力誠に有難うございました。関係者一同心よりお礼申し上げます。

90周年記念事業費決算書

○収入

項目	金額	摘要
同窓会寄付金	42,621,000円	
P T A 寄付金	20,000,000	
雑収入	40,556	預金利子
合計	62,661,556	

○支出

項目	金額	摘要
翠櫛会館増改築費	49,000,000円	追加工事を含む
90周年小史発刊費	5,321,472	印刷5,000部、編集費、配送費
記念式典費	1,279,322	記念品代、祝賀会補助、その他
事務費	1,683,356	
(1)印刷費	622,116	趣意書、振込用紙、封筒代等
(2)通信費	688,970	郵送料(各期別分を含む)
(3)会議費	284,070	募金打合せ、建設打合せ会議
(4)雑費	88,200	振込手数料、募金雑費、消耗品
設備補充費	965,300	電話、テレビ、椅子、トイレ補修、
雑入	4,412,106	冷暖房保守、その他
(1)同窓会会計へ	3,412,106	
(2)翠櫛育英会へ	1,000,000	
合計	62,661,556	

○収支差引残高

0円
上記のとおり報告します。

高崎高校創立90周年記念事業実行委員会
会計 高橋千代三

翠櫛会館増改築は、井上工業・昭和建設共同企業体の施工により、昭和六十一年十一月着工、六十二年三月二十三日引渡しを受けました。冷暖房設備が完備し、内装も一新して、

在校生が快適な合宿ができるようになりました。「九十周年小史」は校内幹事が執筆を分担し、母校九十年の歴史を読み易く要領よくまとめてくれました。記念式典は各方面よりのご来賓の来臨を賜り、厳粛に挙行されました。そして、参会者全員で百周年へ向って、母校のさらなる発展を誓いました。以上ご報告いたします。

●翠櫛文庫●



卒業生の方々の著書で学校へ寄贈して下さったものを図書室に展示しております。それを翠櫛文庫と称しております。現在(62・10・31)まで三百六十二冊になりました。

- | | | |
|-------------------|----|--------------|
| 精神科医からみた教育談義 | 著者 | 大須賀恒夫他53回 |
| 素粒子の謎を追う(朝日選書315) | 著者 | 本間三郎53回 |
| 続々・新しい教育訓練ゲーム | 著者 | 野外篇 大塚則弘他63回 |
| 童話 チェンマイのシンデレラ | 著者 | 門倉まさる56回 |
| 絵のある風景 | 著者 | 豊田一男26回 |
| 鏡の中の他人 | 著者 | " |
| 蠟画の技法 | 著者 | " |
| 砂の毛布 | 著者 | " |
| 豊田一男蠟画集 | 著者 | " |
| 翠櫛体育 | 著者 | 翠櫛体育会事務局 |

行政法 新井隆一46回

納税の立場 課税の立場 "

グリーン・カードはグリーンか "

負担の公平 記帳の責任 "

公益法人課税 学校法人税制 "

歌集 吾妻 原 一雄29回

昭和世相流行語辞典 鷹橋信夫54回

食経 佐藤達全他65回

食物本草 " "

現在を問う 内藤真治54回

秀嶺榛名紫に(51期会報) 村上幹也58回

俳諧生涯 " "

おかげさまで翠櫛文庫も年々充実してまいりました。今年、松浦珠枝さんの尽力によって、文庫の分類目録カードができ、カードボックスも購入し整理ができました。九十周年を迎え、次の百周年へ向けて翠櫛文庫は充実のまちを歩んでいくことと思っております。整えておかなければならない先輩の作品が多くあります。例えば今年生誕百年を迎えた大手拓次の「藍色の暮」、蛇の花嫁、土屋文明の「ふゆくさ」、直木賞作家橋外男の作品等がありません。これらは古書として高価なものになっており、なかなか入手しにくいのですが、翠櫛文庫には是非そろえておきたいと考えております。先輩の方々に今後一層のお力添えいただきたく、翠櫛文庫の係からお願ひするしだいです。

(吉永哲郎 54回)

昭和61年度高高同窓会経常会計報告
(昭和61年1月~12月)

収入の部

費目	61年度予算	実収入	備考
繰越金	258,057	258,057	全日404、通信17
入会金	850,000	842,000	
維持会費	4,500,000	4,773,110	
利息	30,000	73,989	
合計	5,638,057	5,947,156	

支出の部

費目	61年度予算	実支出	備考
会議費	800,000	705,694	總會、各種会議費
祝賀費	450,000	350,300	祝金、卒業証書ケース
饗別費	150,000	87,000	転退職員へ
慶弔費	130,000	113,000	花輪代、水穴先生祝賀会花代
通信印刷費	300,000	179,818	葉書、切手代
旅費	150,000	103,890	京浜同窓会出席等
總會通信印刷費	1,100,000	1,032,544	会報発送郵送料
同窓会報費	1,000,000	917,510	同窓会報編集、印刷費
事務費	600,000	996,890	人件費、事務机、ワープロ等
同窓会長賞費	100,000	27,500	記念品代
補助費	600,000	600,000	図書館30万、翠樹体育会30万
雑費	50,000	130,000	協賛広告等
予備費	208,057	0	
合計	5,638,057	5,244,146	

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

昭和62年1月24日

高高同窓会会計 高橋千代三
松井正樹
矢島哲雄

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

昭和62年1月24日

高高同窓会監査 須永孝
石井敬之助

昭和62年度高高同窓会経常会計予算案
(昭和62年1月~12月)

収入の部

費目	金額	備考	増△減
繰越金	203,010		△ 55,047
入会金	850,000		
維持会費	4,600,000		○ 100,000
利息	30,000		
合計	5,683,010		○ 44,953

支出の部

費目	金額	備考	増△減
会議費	800,000		
祝賀費	500,000		○50,000金杯等
饗別費	150,000		
慶弔費	130,000		
通信印刷費	300,000		
旅費	150,000		
会報発送費	1,100,000		
同窓会報費	1,000,000		
事務費	600,000		
同窓会長賞費	100,000		
補助費	600,000		
雑費	100,000		○ 50,000
予備費	153,010		△ 55,047
合計	5,683,010		

昭和61年度高高同窓会特別会計(同窓会基金)
(昭和61年1月~12月)

収入の部

繰越金	7,218,127	なし
利息	209,619	
61年経常会計より	500,000	
合計	7,927,746	

支出の部

第86回高高同窓会
新年総会へのお誘い

同窓生の皆様にはお元気で御活躍の事とお慶び申し上げます。去年の上毛新聞の三山春秋に紹介された通り、第五十回卒業生より始まった、卒業して三十年目のクラスが幹事になる、高々方式。なる同窓会が、我々のクラスにやってみようという事になりました。去年は高々創立九十周年記念事業も滞りなく済み、新たに百周年に向かっての第一歩が始まるわけです。この時にあたり我々当番期一同、新年総会へ向けて着々と準備を進めております。

尚、總會後の懇親会においては校歌翠樹等声高らかに歌い先輩後輩もなく懐かしい学生時代の思い出に浸り、一日を心楽しく過ごそうではありませんか。

同窓生の皆様、来年の一月の新年総会には一人でも多くの御出席を、五七期生一同心よりお待ちしております。

- 期日 六三年一月二三日(土)
- 時間 午後三時
- 場所 高崎ビューホテル
- 会費 四、〇〇〇円

(当番期代表 山口保男 57回)

事務局だより

○ 創立九十周年記念事業にかかわり、皆様には一方ならぬ御支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

○ お蔭様で同窓会名簿が本年五月に発行できました。御協力に感謝いたします。御入用の会員の方は「高崎高校同窓会名簿委員会」宛に現金書留でお申し込みください。代金は三、九〇〇円(送料込)です。また、本校事務室でも扱っております。

次回の会員名簿発行は五年後の予定です。住所・勤務先等の異動に際しましては、その都度御連絡願います。

なお、本校同窓会の名称をかたつて、類似の名簿等の販売が行われるかもしれませんが、十分御注意ください。

○ 「高崎高等学校90周年小史」を千円でお頒けいたします。御希望の方は事務室までお申し込みください。

○ 五十六回の卒業生の皆さんから十万円と鯉職一式の御寄付があり、深く感謝いたします。寄付金は図書室と吹奏楽部で役立たせていただきました。大空を元気に泳ぐ鯉職の写真は、九十周年小史を御覧ください。

○ 御多忙の折、本会報のために御協力くださいました方々に深くお礼申し上げます。(本部幹事・校内幹事)

高高同窓会報 第21号

発行日/昭和62年11月30日 発行/高崎高校同窓会 編集/本部幹事会 印刷/グラスロード社